

埋もれた大宮びとの横顔

—薬・まじない・庄園の木簡—

前期展示木簡

展示期間

前期 平成三十一年四月八日(月)―四月十七日(水)

後期

四月十八日(木)―四月二十六日(金)

*木簡は二期に分けて展示します。

藤原宮跡からは、現在一万六〇〇〇点以上の木簡が出土している。今回は、今年一月に『藤原宮木簡四』として報告した五二九点の木簡から、二点を厳選し、前期に一九点、後期に二点の木簡を展示する。

前期に展示する木簡は、薬に関わる木簡（展示番号1〜18）とまじないの符号を記した呪符（展示番号19）である。はじめての都市生活のなかで、治療やまじないは人々の精神生活において大きな意味をもった。

大宝令の医疾令逸文によると、当時貴重品であった薬は、毎年中央で必要となる量を典薬寮で推計し、諸国に命じて進上させていた（『令集解』

賦役令37雑徭条古記）。諸国に置かれた採薬師が、雑徭の労働力により薬を集めていたようで、養老令にも同様の規定が存在したらしい（21）依薬所出収採条、（22）採薬師条）。『延喜式』典薬寮にみえる年料雑薬は、これらを根拠としたもので、諸国から毎年進上される薬の種類と量が国ごとに定められている。なお、和泉・志摩・隠岐・淡路の四箇国は、年料雑薬の規定がみえない。

展示番号1は、集められた薬を支給するときに作成された木簡、展示番号2〜18は、薬を貢納したときの荷札や保管したときの付札である。

1 石川朝臣に地黄を賜ったことを記す文書

（『藤原宮木簡四』一七〇号。以下、木簡番号のみを記す）

石川阿曾弥 所賜 忽生地黄

長さ(三〇六)mm・幅(三四)mm・厚さ四mm 六〇八一型式

薬の支給に関わる文書。石川氏は、蘇我氏の一族で、天武天皇十三年（六八四）十一月に賜姓され、朝臣を称した（『日本書紀』同月戊申朔条）。「阿曾弥」は朝臣。

「地黄（ジオウ）」は、ゴマノハグサ科の多年草ジオウの根茎に比定される。「生地黄（シヨウジオウ）」はその新鮮なもの。

鮮地黄（センジオウ）ともいう。地黄は、『延喜式』典薬寮によると、山城国葛野郡薬園・和泉国での生産が知られる（7）地黄煎料条・43地黄地条）。

養老医疾令の規定によると、「凡そ五位以上疾患せば、並に奏聞せよ。医を遣りて療すこと為よ。仍りて病を量りて薬給へ。（致仕の者も亦此に准へよ。）」（24）五位以上病患条）とみえ、五位以上のいわゆる貴族が病気の場合、病気になった者の家から宮内省に報告し、宮内省が太政官に上申して天皇に奏聞した。「医」は、典薬寮の医師・針師など。「致仕」は官を辞すること、七十歳以上になると聴される。

2 武蔵からの桔梗の荷札

(一七五号)

无耶志国薬桔梗卅斤

長さ一九一mm・幅一八mm・厚さ三mm 六〇三三型式

「无耶志国」は、『古事記』にも「無耶志」(天安河之宇気比段)とみえる武蔵国(現在の埼玉県、東京都、神奈川県の一部)の古様な国名表記で、同様の表記は展示番号3にもみえる。

「桔梗(キキョウ)」は、キキョウ科の多年草キキョウの根に比定される。『延喜式』典薬寮によると、武蔵国の年料雑薬に「桔梗四斤十二両」(58武蔵年料雑薬条)とみえ、武蔵を含む二十四箇国(山城・大和・摂津・伊賀・伊勢・尾張・参河・遠江・駿河・武蔵・下総・常陸・近江・美濃・若狭・越前・播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・讃岐・伊豫)の年料雑薬として貢納されていた。養老雜令によると、銀・銅・穀を量るには大斤、その他には小斤が用いられ(2度地条)、『延喜式』雑式によると、薬用を除き大斤が用いられた(7度量権衡条)。大一斤は一八〇匁(約六七四g)で、大一斤(六一六両)は小三斤(小一斤は六一六両)にあたるから、小一斤は約二二五g、小一両は約一四gである。小三〇斤は約六・七五kg。

3 武蔵からの烏頭?の荷札

(一七六号)

无耶志国薬烏

長さ一六二mm・幅一七mm・厚さ四mm 六〇三三型式

「烏」は不詳だが、『延喜式』典薬寮によると「烏頭一斛二斗」とみえ(58武蔵年料雑薬条)、あるいはこれを指すか。「烏頭(ウズ)」は、キンポウゲ科の多年草ウズ(トリカブト)の野生種北烏頭(ホクウズ)。和名エゾトリカブト)あるいはそ

の他多種の同属植物の塊根に比定される。『延喜式』典薬寮によると、武蔵・近江・下野各国の年料雑薬として貢納されていた。『唐律疏議』卷十八、賊盜律に毒薬の一つとしてみえ(16以毒薬薬人条)、日本律にも同様にみえる(16毒薬条)。

4 丹波からの芎藭の荷札

(一七七号)

(表) 伊看我評

(裏) 芎藭八斤

長さ九〇mm・幅二四mm・厚さ四mm 六〇三三型式

「伊看我評」は、『和名抄』の丹波国何鹿郡(現在の京都府綾部市周辺)にあたる。

「芎藭(キユウキユウ)」は、川芎(センキユウ)ともいい、セリ科の多年草センキユウの根茎に比定される。『延喜式』典薬寮によると、丹波国の年料雑薬に「十斤」(78丹波年料雑薬条)とみえ、丹波を含む十二箇国(尾張・遠江・相模・武蔵・下総・常陸・近江・美濃・下野・加賀・丹波・播磨)の年料雑薬として貢納されていた。小八斤は約一・八kg。

5 丹波からの当帰の荷札

(一七八号)

(表) 伊看我評

(裏) 当帰五斤

長さ九四mm・幅二三mm・厚さ四mm 六〇三三型式

「当帰(トウキ)」は、セリ科の多年草トウキ(和名カラトウキ)の根に比定される。『延喜式』典薬寮によると、丹波国が当帰を貢納する規定はみえないが(78丹波年料雑薬条)、隣国の但馬国に「当帰十斤」の規定があり(80但馬年料雑薬条)、十七箇国(大和・伊賀・伊勢・甲斐・武蔵・常陸・飛騨・上

野・但馬・因幡・出雲・石見・播磨・美作・備中・備後・安芸)の年料雑薬として貢納されていた。当帰は展示番号13にもみえるほか、飛鳥京跡苑池遺構から「当帰二両」と記した木簡が出土している(奈良県立橿原考古学研究所『史跡・名勝飛鳥京跡苑池(一)』五一号)。小五斤は約一・一二五kg。

6 黒石英の付札

(二七九号)

(裏) 斤

長さ八二mm・幅一七mm・厚さ三mm 六〇三二型式

「黒石英(コクセキエイ)」は鉱物性の生薬で、『本草集注』の白石英(ハクセキエイ)の項には、白石英のうち黒端を黒石英というところある。白石英は、酸化物類の鉱物の鉱石。『医心方』に「紫石英、伯耆国に出づ」「白石英、近江・備中・大宰に出づ」とみえ、産地が示されている。この木簡が出土した同じ遺構の内濠SD一四〇〇から、白石英が出土している。なお、黒石英は、紫石英(あるいは紫水晶)の色の濃いものとする理解もある。小一一斤は約二・四七五kg。

7 流黄の付札

(二七〇号)

□ 流黄一

長さ一〇八mm・幅二二mm・厚さ三mm 六〇三二型式

「流(硫)黄(リュウオウ)」は鉱物性の生薬で、硫黄(イオウ)のこと。『延喜式』典薬寮によると、相模・信濃・下野各国の年料雑薬として貢納されていた。この木簡が出土した同じ遺構の内濠SD一四〇〇から、硫黄が出土している。『延喜式』典薬寮によると、左右馬寮に馬薬として年

六升四合が支給されており(24馬寮雑薬条)、『同』左右馬寮にも毎季「硫黄一升六合」を「官に申して請受けよ」とみえる(35馬薬条)。

8 白朮の付札

(二七三号)

白朮四

長さ九〇mm・幅一六mm・厚さ三mm 六〇三二型式

「白朮(ビヤクジュツ)」は、キク科の多年草ビヤクジュツ(和名オオバナオケラ)の根茎に比定される。四文字目は助数詞で、斗または升であろう。『延喜式』典薬寮によると、十三箇国(山城・大和・摂津・尾張・参河・駿河・安房・下総・常陸・近江・美濃・飛驒・信濃・越前・越中・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・讃岐・伊豫)の年料雑薬として貢納されていた。天武天皇十四年(六八五)九月、天皇の病のために誦経がおこなわれ、十月、十一月には白朮を煎じさせたのみえる(『日本書紀』同年九月丁卯条、十月庚辰条、十一月丙寅条)。現在でも胃腸薬に配合されており、日本古典文学大系『日本書紀』下(岩波書店、一九六五年)の頭注は胃薬として用いたと解釈する。あるいは、天武天皇自身が白朮を服用した可能性も指摘される。『万葉集』には、「うけら」の語で東歌武蔵国歌に二首みえるほか(巻十四・三三九三番歌・三三九七番歌)、国不詳の相聞歌一首にもみえる(巻十四・三五二四番歌)。

9 人参の付札1

(二七三三号)

人参十斤

長さ一二九mm・幅二〇mm・厚さ三mm 六〇三二型式

10 人参の付札 2

(一七四号)

人参十斤

長さ一〇七mm・幅一九mm・厚さ二mm 六〇三二型式

「人参（ニンジン）」は、ウコギ科の多年草ニンジン（和名オタネニンジン）の根に比定される。『延喜式』典薬寮によると、十箇国の年料雑薬（撰津・伊勢・甲斐・陸奥・若狭・越前・丹波・美作・伊豫・大宰）として貢納されていた。藤原宮跡東面外濠SD一七〇（藤原宮第二七次調査）から「人参一両」と記した木簡が出土している（『藤原宮木簡三』二八号）。小一〇斤は約二・二五kg。

11 杜仲の付札

(一七六号)

杜仲十斤

長さ一一二mm・幅一八mm・厚さ五mm 六〇三二型式

「杜中（トチュウ、杜仲とも）」は、トチュウ科の落葉高木トチュウの樹皮に比定される。『延喜式』典薬寮によると、十三箇国（撰津・伊勢・尾張・安房・上総・常陸・近江・美濃・若狭・但馬・伯耆・播磨・伊豫）の年料雑薬として貢納されていた。小一〇斤は約二・二五kg。

12 独活の付札

(一七七号)

独活十斤

長さ八八mm・幅二二mm・厚さ三mm 六〇三二型式

「独活（ドツカツ）」は、セリ科の多年草毛当帰（モウトウキ。和名シシウド）などとウコギ科の多年草食用樗木（シヨクヨウソウボク。和名ウド）などの根と根茎に比定される。『延

13 当帰の付札

(一七〇号)

当帰十斤

長さ一一七mm・幅二二mm・厚さ四mm 六〇三二型式

当帰は、展示番号5を参照。

14 葛根の付札

(一七五号)

葛根六斤

長さ七九mm・幅一九mm・厚さ五mm 六〇三二型式

「葛根（カクコン）」は、マメ科のつる性木本葛（カツ。和名クズ）の塊根に比定される。『延喜式』典薬寮によると、山城・伊勢・近江・紀伊各国の年料雑薬として貢納されていた。小六斤は約一・三五kg。『本草集注』によると、五月五日の日中に採り、屑にするという。推古天皇十九年（六一一）、二十年、二十二年の五月五日に薬獵の記事がみえ（『日本書紀』同日条）、この頃までに五月五日の薬獵が宮廷行事として確立していたのではないかとする理解もある。

15 知母の付札

(一七五号)

知母五斤

長さ一五六mm・幅一八mm・厚さ四mm 六〇三二型式

「知母(チモ、知母とも)」は、ユリ科の多年草チモ(和名ハナスゲ)の根茎に比定される。『延喜式』典薬寮によると、八箇国(摂津・伊勢・相模・武蔵・近江・丹波・播磨・備中)の年料雑薬として貢納されていた。小五斤は約一・一二五kg。この木簡が出土した地点のすぐ南でおこなった藤原宮第一〇次調査において、同じ遺構の西面内濠SD一四〇〇から「知母九斤」と記した木簡が出土している(『藤原宮木簡一』**四九**号)。

17 苜蓿の付札

(一七六号)

苜蓿十斤

長さ一二五mm・幅二〇mm・厚さ二mm 六〇三二型式

「苜蓿(ゴカ。あるいは、五茄・五茄皮(ゴカヒ)とも)」は、ウコギ科の落葉低木ゴカなどの根皮に比定される。『延喜式』典薬寮によると、十一箇国(伊勢・尾張・参河・相模・下総・近江・美濃・美作・周防・紀伊・讃岐)の年料雑薬として貢納されていた。小一〇斤は約二・二五kg。この木簡が出土した同じ遺構の内濠SD一四〇〇から、ほかに、「五茄□」(『藤原宮木簡四』**一七五号**)「□□」(「五茄カ」皮六斤)「同」(「一七六号」と記した木簡が出土している)。

16 夜千の付札

(一七五号)

夜千「十」斤

長さ一九二mm・幅二二mm・厚さ三mm 六〇三二型式

「夜千(ヤカン)」は、アヤメ科の多年草射干(ヤカン。和名ヒオウギ)の根茎に比定される。『延喜式』典薬寮によると、十六箇国(山城・摂津・伊賀・伊勢・尾張・駿河・越前・越中・丹波・出雲・石見・備後・安芸・周防・紀伊・讃岐)の年料雑薬として貢納されていた。「十」は別筆の可能性がある。小一〇斤は約二・二五kg。この木簡が出土した同じ遺構の内濠SD一四〇〇から、ほかに、「□□」(「夜千カ」三両)と記した木簡が出土している(『藤原宮木簡四』**一七三号**)。

18 桃人の付札

(一七五号)

桃人七升

長さ八一mm・幅一八mm・厚さ四mm 六〇三二型式

「桃人(トウニン、桃仁とも)」は、バラ科の落葉小高木桃(トウ。和名モモ)または山桃(サントウ)の種子に比定される。『延喜式』典薬寮によると、四十一箇国(山城・大和・摂津・伊賀・尾張・参河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・近江・美濃・下野・若狭・越前・能登・越中・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・阿波・讃岐・伊豫・土佐)の年料雑薬として貢納されていた。当時の一升は今量の〇・四五升(約〇・八一ℓ)にあたり、七升は約五・六七ℓ。藤原宮跡東面外濠SD一七〇(藤原宮第二七次調査)から「桃人一升」(『藤原宮木簡三』**一七六号**)、同北辺地区のSD一〇五から「桃子一二升」と記した木簡が出土している(奈良県教育委員会『藤原宮』七七号)。

(符録1) (符録2) (符録3) 鬼小 (符録4) 今

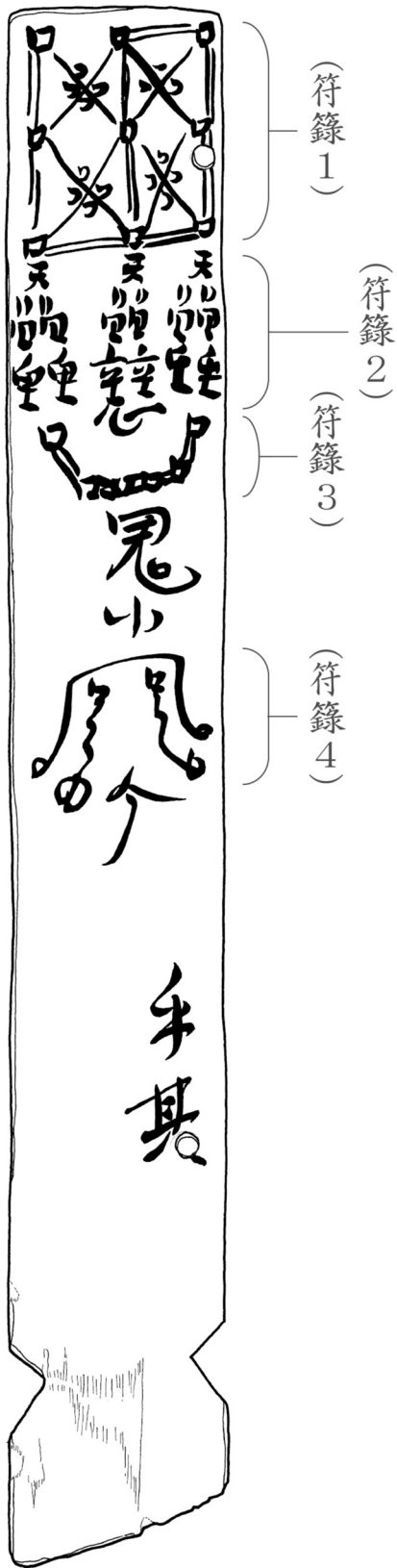
乎其

長さ三八九mm・幅五三mm・厚さ六mm 五〇三二型式

木簡が出土した井戸は、隅柱に横板を落とし込んだ井戸枠が三段残っており、木簡は西南隅の柱に立てかけられた状態で出土した。同じ坪内から、年輪年代測定により天武天皇十一年(六八二)に伐採されたと判明した井戸枠をもつ井戸がみつかっており、出土土器に共通性が認められることから、この井戸も藤原宮造営期のものである可能性が高いとみられる。

木簡は、折敷^{おしき}底板を転用したものである。表面から穿たれた二箇所^{ふたか所}の穿孔^{せんこう}は、符録^{ふろく}や文字と重複^{じゅうごう}関係^{かんけい}があり、いずれも穿孔^{せんこう}が後である。符録1は、中国宋代の『天原^{てんげん}発微^{はつび}』(『正統道藏^{せいとうどうざう}』(道教の經典の集成)所収)にみえる、星座の一つ羅堰^{らえん}

との類似が指摘される。ここには、「九星^{きゅうせい}、牽牛^{けんぎゅう}の東に在り。水潦^{すいりょう}を壅^{ふせ}ぎ、灌漑^{かんがい}の渠^{みぞ}と為す」とみえ、洪水をせきとめて灌漑用水とするの意であることから、この呪符も、治水あるいは井戸の祭祀に関わるものと推測される。『天原発微』は十三世紀に成立した史料であるが、「羅堰」は『晋書』天文志、『隋書』天文志にも確認されることから、七世紀に遡るものとみて矛盾はない。この呪符は、藤原宮の造営時に埋められた井戸から出土したものであり、羅堰の機能から、近くを流れる飛鳥川の氾濫をおさえ、造営工事が無事に進むように、治水を託したものとする理解も示されている。



展示番号19実測図

木簡出土遺構

西面内濠SD一四〇〇(展示番号1~18) SD一四〇〇は、藤原宮西面

大垣SA二五八の東約一〇mを北流する素掘りの南北溝である。藤原宮第五八、一次調査では、一〇m分検出した。幅一・六~二・一m、深さ〇・七~〇・九mで、堆積層は四層に分けられる。最上層は埋立土で瓦を大量に含む。最下層には、宮造営時の木材の削屑などが含まれている。木簡は、最下層を除く三層から出土したが、特に上から三層目から多く出土した。薬に関わる木簡がまとまって出土した点が注目される。特筆される遺物として、硫黄、白雲母、白石英、磁鉄鉱、樹脂状品(琥珀または松脂か)など鉱物類があり、薬品として捉えることができる。木簡は一三一点(うち削屑六一点)出土した。

なお、SD一四〇〇は、第五八、一次調査以外に、奈良県昭和四三年度、第一〇次、第三三次、第三四次、第五四、一六次、第五八、九次の各調査において検出しており、総延長は二三五mにおよぶ。木簡は第一〇次調査から四点(『藤原宮木簡一』四九〇~四九三号)出土しており、現在のところSD一四〇〇の出土木簡総数は、一三五点(うち削屑六一点)となった。

井戸SE八四三一(展示番号19) SE八四三一は、藤原宮西方官衙南地区でおこなった藤原宮第七九次調査で検出した井戸。掘方の開口部が直径二・四mの円形で、上から深さ一mのところから下は一辺一・五mの方形となる。深さは一・八m。井戸枠の構造は、まず方形の開口部の掘方四隅に隅柱を立てる。隅柱には互いに直交する位置に二条の縦方向の溝を切り、そこに両端を楔形に加工した横板を数枚落とし込む。木簡は折敷を転用した呪符一点が出土した。

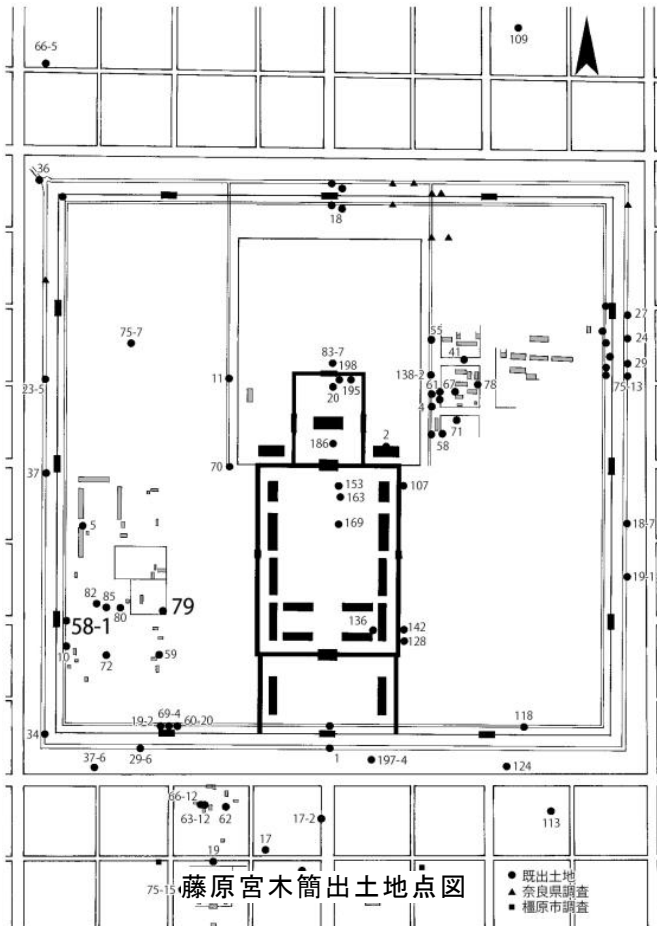
用語解説

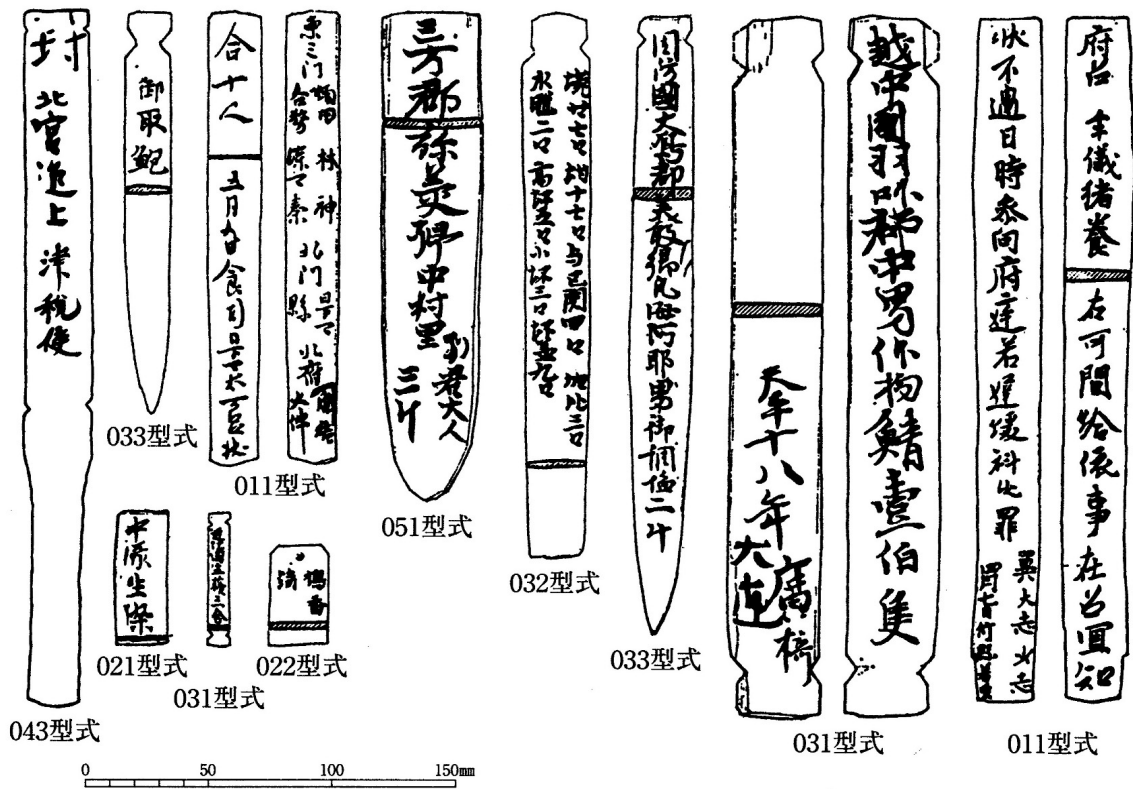
『唐律疏議』 唐の高宗永徽三年(六五二年)に編纂された唐律の注釈書。

長孫無忌等により編纂され、翌永徽四年に頒布された。

『本草集注』 梁の陶弘景(四五六~五三六)が五〇〇年頃に編纂した中国の本草書(薬物書)。三六五種の薬品を収載していた『神農本草経』を増注、再整理したもので、三卷本と七卷本があった。『本草経集注』ともいう。藤原宮の時代の薬の調達と保管は、『本草集注』に掲載された薬名にもとづいていたらしい。

『医心方』 丹波康頼(九一二~九九五)が永観二年(九八四)に編纂した現存する日本最古の医書。中国六朝・隋唐、朝鮮の医薬関係書百数十種からの引用で構成されており、中国医学を研究する上でも貴重。





木簡の型式分類とその説明

型式番号は四桁の数字で示し、第一位の数字は時代を示す。五は飛鳥時代、六は奈良時代（藤原宮期を含む）、七は平安時代である。

- 一一型式 長方形の材のもの
- 一五型式 長方形の材の側面に穴を穿ったもの
- 一九型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの
- 二一型式 小型矩形のもの
- 二二型式 小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの
- 三一型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある
- 三二型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの
- 三三型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの
- 三九型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの
- 四一型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの
- 四三型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状に作り、残りの部分の左右に切り込みをいれたもの
- 四九型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの
- 五一型式 長方形の材の一端を尖らせたもの
- 五九型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの
- 六一型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの
- 六五型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの
- 八一型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの
- 九一型式 削屑